分類のゆれについて

佐藤　サチ

資料組織について概説と演習の両方を担当していますが、中でも分類には苦労します。

以前の職場での話ですが、若い頃大先輩達に分類について「個人毎のゆれがあるだけでなく、同一人でも時間軸でゆれる」と聞かされました。今のように書誌データが早く手軽に手に入らないため自館で分類するしかありませんが、せめてゆれは起こさないようにと所蔵の類書をカードで確かめながらの作業でした。その後、冊子体の蔵書目録作成担当になった時は、１冊毎に「あるべき分類」を求めて先進館の蔵書目録を参考にしつつ NDC と首っ引きでした。

今年度は資料組織演習のテキストとして「JLA 図書館情報学テキストシリーズ　１０　資料組織演習　新訂版」を使いました。これには「演習問題」、「総合演習問題」があるのですが、「解答書」なるものが存在しません。学生に提示すべき「正解」を求めているうちに「分類のゆれ」に直面してしまいました。

そこで、このテキストをサンプルに「分類のゆれ」について述べたいと思います。

分類の総合演習問題の中に、問題２６として「次の図書に対して、詳細な分類記号を与えなさい。」として６０問があります。

「正解」を得るために、国立国会図書館（以下 NDL）の書誌データ中の NDC 分類と、某大手 MARC を使用している公共図書館（以下Ｘ館）の分類をそれぞれの OPAC で調べました。

問題として出された図書の情報は、書名（副書名も含む）と著者名、長くて５０字の解説のみで、２館の書誌データと同定するのはやや乱暴かと思いましたが、６０問中５３問が実在の図書と一致しました。タイトルの小さな異同をケアレスミスとみなせば実在の図書と考えられるものが２問でした。そこで、どちらの OPAC でも実在を確認できなかった５問を除いた５５問を対象としました。

５５問中、NDL とＸ館の分類が一致したものは４３問です。７８％の一致率です。これは「多い」というべきなのでしょうか、「少ない」というべきなのでしょうか。

NDL にしろ、某大手 MARC 作成企業にしろ、その道の専門家が図書を実際に手に取って分類をしていると聞いています。と言うことは、分類のこの程度のゆれは許容範囲なのかもしれません。実務として分類していたときは、「外部データを参考に自館にふさわしい分類を」という方針でそれ程気になりませんでしたが、今は学生に「分類にはゆれがある」ことをしっかりと伝えています。

参考までに NDL とＸ館で分類の異なっている例をあげます。

１　利根川：　２１３（NDL）　５１７，２１３（Ｘ館）

２　ネパール：　２９２，５８７　３０２，２５８

３　お魚の文化誌：　４８７，５　６６４，６

４　地球温暖化とオゾン層破壊：　５１９　４５１，３５

５　電磁波：　４２７，７　５４７，５

６　グアテマラ先住民の女たち：　３１６，８５７１　３６７，２５７１
７　隣りのイラン人：　３３４，４１　３３４，５２６３
８　議事堂の石：　５１１，４２　５２６，３１
９　哲学の最前線：　９１３，６　１３３，９
１０　若者ことば辞典：　８１４，９　８１３，９
１１　Azuma：　７１０，８７　７１５
１２　大人のための勉教法：　００２，７　３７９，７

昨年度のこの欄に「他大学図書館の見学をしたい」と書きましたのでその報告をします。

昨年度末と今年度末に大分県大学図書館協議会研修会に参加して、大分県立看護科学大学と立命館アジア太平洋大学の図書館を見学しました。

これは昨年度末ですが、大学コンソーシアム京都図書館共同事業検討委員会の図書館員を対象とした講演会に出かけました。『図書館に訊け！』の著者・井上真琴さんの講演等を聴き、翌日は同志社大学図書館と立命館大学図書館の見学をしました。

速効性は期待できなくても、見聞を広めることは図書館員としてまた教える立場として必要なことだと思います。

（さとう　さち　別府大学附属図書館）